昭和39年11月10日第三種郵便物認可　昭和41年4月5日国鉄東局特別扱承認雑誌第2343号　昭和41年7月1日　第3巻第7号通巻第23号（毎月1回・1日発行）

月刊漫画

ガロ

No. 23
1966
7月号

カムイ伝⑳

赤目プロ作品
白土三平

（前回まで）　　カムイ伝⑳

藩内の一商人**蔵屋**が、糸買所の独占権を利用して、百姓達の繭を買いたたいたことから、再び**玉手村**において一揆が勃発した。この一揆の勢いは、まず村内の改作所を打ち毀し、続いてその足を蔵屋に向けた。ときすでに、この一揆の報は、城中の目付役**橘軍太夫**のもとに聞こえ、蔵屋は、その軍太夫配下の兵士達によって完全に固守されていた。ために、蔵屋に迫った一揆の勢力は、この守備隊の勢力と真っ向から衝突し、相互に死傷者を出して対立する。

このとき、一揆の先鋒に立ったのは、理由あって**正助**を退けこれに肩代わりした**苔丸**であった。彼は、人を使って、全国の繭相場を書き記した目安を**城代家老**のもとに届けさせ、蔵屋の不当な買いたたきを訴える一方、蔵屋を交渉の場に引き出し、繭代金の前渡しと、最低原価の保証の要求を突きつける。もしこの要求を容れなければ、問題の繭のすべてをその場で焼き捨てることを条件としてである。

が、百姓達にしても、その繭は、自ら汗と血の中で収穫したものだったのである。だから、もし蔵屋が要求を容れなければ、一揆の潰滅はもとより、百姓達にとって、それは死を意味していた。当然百姓達は動揺し、不安におし潰された。この交渉が、明らかに蔵屋の立場の弱みを掌握したものではあっても、それはやはり死を賭した賭けだったのである。

一揆は勝利した。数多くの犠牲者を残して……。その人達のことに思いを寄せながら、苔丸と正助とは**花巻**への道を辿って行った。

顧れば、一揆を勝利に導いた要素には、さまざまなものがあろう。人物に限って言えば、苔丸の功績が目立つ。しかしそのことは、彼がかっての玉手一揆の主謀者であり、捕えられてリンチを受ける傍ら、目の前で父親を見殺しにするという大きな代償につり合う経験を持ち合わせていたことと無関係ではなかろう。それに、持ちまえの才能と勇気によって、一揆を有利に導いた正助の功績も際立っている。苔丸が、一揆の途中で正助を退けたのも、今後においてその正助の才能と勇気とがより発揮され、人々にとっても必要となることを見抜いていたからにほかならない。

しかし、何よりも大きな正助の功績は、日置領内においては全く初めての試みである棉作に成功したことであろう。この新農作物開発の成功は、単にそのものの成功である以上に、大きな意味と価値をもつものである。それは、棉の農作物としての性格が、従来の米麦などの農作物と異なり、商品作物であることである。これによって、百姓がその経済面において、直接市場の経済と結びついていく可能性を持ったことになる。すでに、五代木の商人**夢の七兵衛**が、正助のこの棉作りに興味を示していることは明らかである。それが、彼のどえらい夢とどのような関係にあるかは、今はわからないが、**苔丸**と**ナナ**の養蚕も含めて、この商品作物は、今後さまざまな面で重要な影響を及ぼしていくに違いない。

また、しかし、今どの一揆には、勝利を得ても、それが繭に関して発したものであることを思えば、単にそのスムーズな発展ばかりは望めないかもしれない。

一揆のさ中において、日置藩内部の勢力争いである目付軍太夫と城代家老の間は、一層その溝を深めたようである。これらの状況から発したものが、今後どのような形で、日置領とその領下の人人の上に降りかかってくるか。棉作りや田植えの過程にみられた正助と非人たちとの協力関係、また、正助とナナの恋愛も、カムイが危惧するように、所詮は非人と百姓ということから、自由になり得ないものなのか……。

月刊漫画 **ガロ** 七月号 目次

三平

赤目プロ作品　白土三平

目安箱⑯

政治の完全犯罪について

上野昻志

一九三四年に、魯迅は次のように書いている。

「日本の刊行物にも、禁忌はある。しかし、削除された個所は、空白を残すなり、点線を引くなりして、読者は、それと知ることができる。ところが、中国の検閲官は、空白を残すことを許さず、必ず続けさせる。そこで読者は、検閲削除の痕跡をみることができないから、あいまいでぼんやりした点は、全部作者の責任にされてしまう。このやり方は、日本より、おおいに進歩している。」

そうだ、たしかに、この検閲の方法は進んでいる。これにくらべれば、「社会」という字を恐れ憎んで、「昆虫の社会」という自然科学の本の書名を許可しなかった日本の検閲官などは、すこぶる単純素朴であるといわねばならない。

否定するものは、否定されるものによって規定される。魯迅の闘争の複雑多様さ、その柔軟さと強靭さは、旧中国の支配の巧妙さ、その「進歩」した方法との対決において出てきたのであろう。

ところで、かって魯迅によって指摘された日本の支配者の素朴さは、今や失われつつある。私達は、革命後の中国に永眠している魯迅に告げねばならない。「日本の支配の方法も、日々に進歩し洗練されてきた」と。

例えば次の新聞記事を読んで欲しい。

『終盤国会の波乱のタネと思われていた郵便法改正案が、今週中にスンナリ衆院を通過する見通しになった。というのも、自民党が野党へのサービスにこれつとめ、質問はやり放題、公聴会も開きます、とシタ手一方に出たので、さしもうるさい野党側がすっかり根負け。社会党の石橋国対副委員長も、十六日の記者会見では、「どんな要求をもち出しても、向う(与党)は「ああそう、いいよ」と、いいなりなんだ。国会運営上は大進歩なんだろうがねえ……」と振りあげたこぶしのやり場がないといった口ぶり。』(四月十七日・朝日新聞・朝刊・「記者席」)

一九六〇年の安保条約の強行採決、そして昨年の日韓条約の強行採決とくらべて、こちらはなんとあか抜けしたやり方ではあるまいか。郵便料金値上げの問題が、安保や日韓条約より小さいということは、ここでは問題ではない。これから先、このやり方に味をしめた支配者たちは、大きな問題であればある程、できるかぎり摩擦を少くして、立法化していこうとするのにちがいないのだ。「吠えたいだけ吠えるがいいさ」、「野党側の質問時間は欲しいだけやるよ、

なんせ民主的ルール第一だからねえ」、そんな言葉が、私の耳には聞こえてくる。

国会を通じて政治が行なわれるところでは、国会において多数をしめるものの意志が、最終的に、常に通ることを彼等は知っている。したがって、何も速記録にのらない程あわてくさって採決する必要は少しもない。風吹けば吹け、雨降らば降れ、天下は相も変わらずおれ達のもの、とばかりに落ちつきはらっていられる。郵便法改正について、国会が〝波乱〟をおこさなかったように、今後国会は再び〝荒れ〟ることなく、民主的ルールのもとに運営されて行くかもしれない。日本の〝民主化〟も、いよいよ〝土着化〟したのかもしれない。だが、その時、支配の独裁は、民主的国会運営というスマートな衣裳の中でおのれの欲するがままを行なっているだろう。それは、ポーの小説の中のオランウータンの殺人のように、あまりに露骨すぎて、かえってわからない犯罪と同様開けきった白昼の中で、公然と行なわれている完全犯罪―ファッシズムに他ならない。

ところで、支配の方法はこのように〝進歩〟してきたのに、それを阻止するものが、相も変わらず「振りあげたこぶし」の処理に首をひねっているようでは、全くダラシがない。「振りあげたこぶし」の処理など簡単だ。目の前に人がいればそいつをなぐればいいし、人がいなければ、自分の横面でもはりとばして、呆けた頭をはっきりさせればいいのだ。

相手がシタ手に出たり、妙にほめられたりすると、すぐやにさがってしまうようなお人好しには、体制をくつがえすことなどできはしない。だいたい何のために政府のやり方に反対するのか。国会での政治的かけひきを商売にしているうちに、遠い目標が失われて、商売だけにうき身をやつすようになる。敵がひとことといえば、オームのように「絶対反対」と威勢のいいかけ声をかけていれば、それで自分の良心的な態度が表明される世間に対して、自分の良心を示すことができて、それで飯が食えるんだったら、こんないい商売はない。しかし、そんな商売が成りたたなくならなければ、この社会は、変わりはしないのだ。

政治よりも生活の方が大きいことは自明の理だ。国会、内閣、裁判所などをささえているのは、自分の良心など表明することなく、黙々と働いている人達に他ならない。

議会が政治を行なうのではなく、議会の外が政治を決定するはずなのだ。そのことは、国会で白昼の完全犯罪が実行されつつある今、いよいよはっきりしてきた。アリバイは常にある。否、野党が懸命になって彼らのアリバイをつくってくれる。どこにも不正を行なった形跡はない。そもそも彼らの言葉が法律であってみれば、仮にも不正など行なわれるはずはない。かくて、秩序は永遠に保たれつづけるかに見える。が、果たしてそうか。はじめに法律があったのではないことを、国会が約束の上にきずかれた王国にすぎないことを、知るべきである。完全犯罪は小説の中にあってさえ存在しがたい。

約束によってなり立つ王国は、約束によって亡びる。吠えない犬は突然かみついて、雷が鳴ってもはなさないかもしれないではないか。

（昭和41・5・1）

〈ガロ〉特別セール案内

バックナンバーの部

今、全国で爆発的な人気を呼んでいる白土三平の大河マンガ〈カムイ伝〉は昭和39年12月号から本誌に連載されております。この「カムイ伝」を第1回からお読み下さる方々のために、バックナンバーの特別割引セールを実施中です。ご利用下さい。

「カムイ伝・在庫セット」

40年6月号〜41年3月号

10冊・1組 特価 1,300円

（〒1組・100円）

新刊予約の部

月刊雑誌**“ガロ”**を、**少しでも安く**、しかも**続けて読みたい方々の**ご要望にこたえて、次の通り**特別予約セール**を実施いたしております。

〈Aコース〉　6カ月分予約前納の方には、800円に割引の上、「白土三平傑作選集」(130円) を無料進呈します。

〈Bコース〉　1カ年分予約前納の方には、1,600円に割引の上、「白土三平傑作選集」(300円)を無料進呈します。

★郵便料金の値上げに伴い、今後のご予約には送料(Aコース・100円、Bコース・200円)を申し受けることになりましたのでご諒承下さい。

申込先・東京都千代田区神田神保町1の55　青　林　堂

堂々20巻完成!!

サスケ

—大長編忍者マンガ

① 微塵がくれ	(品切)		⑪ 影ヌイ	220円
② 炎がくれ	180円		⑫ 犬方	220円
③ 竜神	180円		⑬ 風神	220円
④ 影分身	180円		⑭ 所替え	220円
⑤ 鬼姫	(品切)		⑮ 樹氷	220円
⑥ 死斗	200円		⑯ 白ッ子	220円
⑦ 謎の易者	200円		⑰ 死穴	220円
⑧ 神通力	200円		⑱ ふみ絵	220円
⑨ 猿彦	200円		⑲ オボロ影	220円
⑩ 忍群	220円		⑳ エトリ忍法	220円

20巻完成記念サービス
セールは終りました

新人作家募集!!

青林堂と赤目プロでは、優秀な新人作家を募集しています。ふるってご応募下さい。

投稿規定

① おもしろいこと。
② 内容第一。
（技術は実験、経験をとおして、おのずと進歩するものです）
③ 30ページ以内。(1ページでもよい)
④ 時代もの、現代もの、SF、コマ画、その他自由。
⑤ 寸法＝タテ27.3センチ・ヨコ18.2センチ
（コマ取りは自由）
⑥ 必ずスミ1色（墨汁または製図用黒インキ使用）で画き、アミ（ウス色）はつけない。セリフなどの文字はエンピツでかくこと。
⑦ 〆切は別に設けません。
⑧ 審査＝青林堂編集部、赤目プロ
⑨ 誌上に発表された作品には、原稿料を支払います。
⑩ 送り先＝青林堂「ガロ」編集部

●現金の送金は必ず書留にして下さい。また、送金は郵便切手でも結構です。但し一割増です。

●投稿作品には絶対に手紙を同封しないで下さい。また、原稿返却を希望の方は必らず返送料（切手）を同封して下さい。